

本書はもともと、アジア経済研究所図書館フォト・アーカイブス「一九九〇年代インド社会と子ども達」の解説文として執筆された。九〇年代後半のおよそ五年間、毎年のようにインド全土の「児童労働の地」に働く子どもの実態を調べ、その姿を写真に収めた。わたくしの思いのなかには次第に三つの、それぞれが絡み合った鎖のような抜き差しならぬ問題、すなわち教育の貧困、慣習的労働、そして飢餓的貧困が子どもの今を、そして将来を覆っていることを感じとった。二四二枚に及ぶ写真の一枚一枚がこのような障壁の高さを暗示している。本書はこれらの観察をもとにしておよそ五地域の「児童労働の地」に働く子どもの姿を描いた報告書である。

本書の題名、「インド児童労働の地をゆく」の含意について記しておきたい。インド独立後の半世紀を振り返ると、経済発展のプロセスは、静止状態から、停滞、そして成長の加速化の段階に入った。それは九〇年代当初から始まる経済自由化への政策転換がもたらした結果である。かつて、成長が頓挫した一時期があった。しかし、今は、後戻りすることのない成長軌道に入ったものと評価してよい。本書の扱う時期、一九九〇年代はインドがかつて経験したことがないほどの、激しい、経済・社会の変動が渦巻いた十年であった。

この時間枠のなかの叙述が主となっている。そこに出現した経済・社会問題の一つが「不
就学児童」の存在である。都市、農村を問わず、依然として初等教育の機会は欠如し、貧
困状態とあいまって不就学児童が増大し、その結果、子ども達は安価な労働力として生産
の現場に押し出される。インドの産物で児童労働と無縁なものはない、と評される所以で
ある。世界市場との接点を拡大しつつある輸出経済の内実はここにいる「不就学児童労働」
の、厳然として存在する事実なしには語れない。これがわたくしの立論の前提でもある。
そして、今もなお、「児童労働の地」(The Land of Child Labor)と呼ばれる産地、産業、地
域が拡大・増加を続けている。本書はそのような児童労働の実像の一端を現地調査によっ
て明らかにしたものである。現地調査は一九九五〜九八年の期間にわたって行われたもの
で、すでに十年余を経過している。

本稿を脱稿して間もなく、インド中央政府女性・児童開発省から、つぎの内容のプレス・
リリース (Government of India, Press Information Bureau, Wednesday, August 06, 2008) を受け取っ
た。引用すると、「近く、中央ならびに州政府の次官級協議機関」(子どもの権利保護に関す
る国民協議機関 NCPCR) を発足させ、『教育を受ける権利』を実現し、『児童労働を撤廃』
するために必要な法律および政策の再検討を行う。それにより児童労働を「過去の歴史」
とし、教育を受ける権利を完全に実現する、と。今から六〇年前、すでにインドの憲法は

同じ言葉で同じことを国民に約束していたのである。子どもの「教育をうける権利」を實現し、「児童労働を撤廃」する、と。しかし、二二世紀の最初の十年をやがて終わろうとする今もなお、「児童労働の地」は変わることなく存在し続けているのである。

本書は、わたくしが当時所属していた明治学院大学国際学部教育プログラム「インドの不就学児童労働」（一九九五～九八年）の一環として行った、毎年一カ月に及ぶ現地調査の成果をとりまとめたものである。その間に撮影した写真は前述のアジア経済研究所図書館フォト・アーカイブス「一九九〇年代のインド社会と子ども達」として収録されている。本書が完成するまでにアジア経済研究所図書館の多くの方々の助力を受けた。とりわけ、泉沢久美子氏（当時図書館次長）のご助力に負うところが大きい。また、坂井華奈子氏は文献リストおよび児童労働・教育に関する指標から成る付属資料の作成を、成塚雅美氏は膨大な量の現地記録写真の処理をそれぞれ担当され、その成果を本書に収めることができた。本書はこれらの方々のご尽力なくしては完成することはなかった。改めて、ここに深く感謝の気持ちを表したい。

二〇〇九年仲冬

著者記

謝 辞

現地調査―通算五年間（予備調査 一九九四年～九五年―本調査 一九九六～九八年）におよぶフィールド・ワークは明治学院大学国際学部との教育プログラム「インドの不就業児童労働」の一環としておこなわれた。現地調査では多くの現地研究者の力添えがあったことを記しておきたい。とくに、マンガロール大学経済学部教授（当時）農業経済学者 Somnu Giriappa 博士は南インド一帯、タミル・ナードゥ州、ケーララ州、カルナータカ州の農村部の現地調査に同行し、タミル語、カンナダ語などの現地語通訳や地域情報の提供・解説など貴重な助言・助力をうけた。同氏のご協力に深く感謝したい。

調査協力機関―長い年月にわたり現地調査に協力された諸機関をここに記して感謝の意を表したい。

- ①タミル ナードゥ州 Madras Institute of Development Studies (Chennai)
Indian Council for Social Welfare (Madurai)
NGO: Roof for the Roofless (Chennai)
- ②カルナータカ州 NGO: Campaign Against Child Labour (Bangalore)
Mangalore University (Mangalore)
NGO: (CWC) *The Concerned for Working Children* (Udipi)
- ③ラージャスターン州 Institute of Development Studies (Jaipur)
- ④西ベンガル州 NGO: (CRS) Cathedral Relief Service, St. Paul Cathedral (Kolkata)

写真提供―三章「タール砂漠の児童労働」掲載の製品写真は Exotic India Art 社の、また、同章本文中に掲載の写

真三枚はジャイプール・ラグズ基金 (Jaipur Rugs Foundation, Jaipur, Rajasthan) Photo Gallery からの使用許可を得た。本書ジャケットの掲載写真二枚と、四章「ガンジス平野のカーペット村」掲載写真一枚は、スイス在住写真家 Adrian Moser 氏の許可を得た。その他の写真提供者・出典はそれぞれに別記した。関係者・機関のご好意に厚くお礼申し上げます。

付属資料の作成—アジア経済研究所図書館の下記職員の製作による。ご協力に深く感謝したい。

1 文献解題、参考文献、児童労働・教育統計—坂井華奈子氏 2 写真調製—成塚雅美氏

フォト・アーカイブスとのリンク—各章本文中および、章末「注」の項目に関連する電子画像はアジア経済研究所図書館 開発途上国フォト・アーカイブスインド特集「一九九〇年代のインド社会と子どもたち」<http://d-arch.ide.go.jp/photo-archive/India/children/>にオンライン公開されている。括弧内の写真番号により拡大画像を閲覧することができる。写真調製にあたった図書館職員 泉沢久美子（当時図書館次長）および、成塚雅美（当時図書館資料企画課）両氏のご尽力に深くお礼を申し上げます。

本書編集と製作—アジア経済研究所研究支援部 真田孝之氏からは原稿の細部にわたって入念な点検と有益な助言を受けた。また、各章の地域図等を作成していただいた。本書の製作にご尽力された同氏に深く感謝の気持ちを表したい。

児童労働の地：分布地図

